台湾侵攻１

最後通牒

大石英司
Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

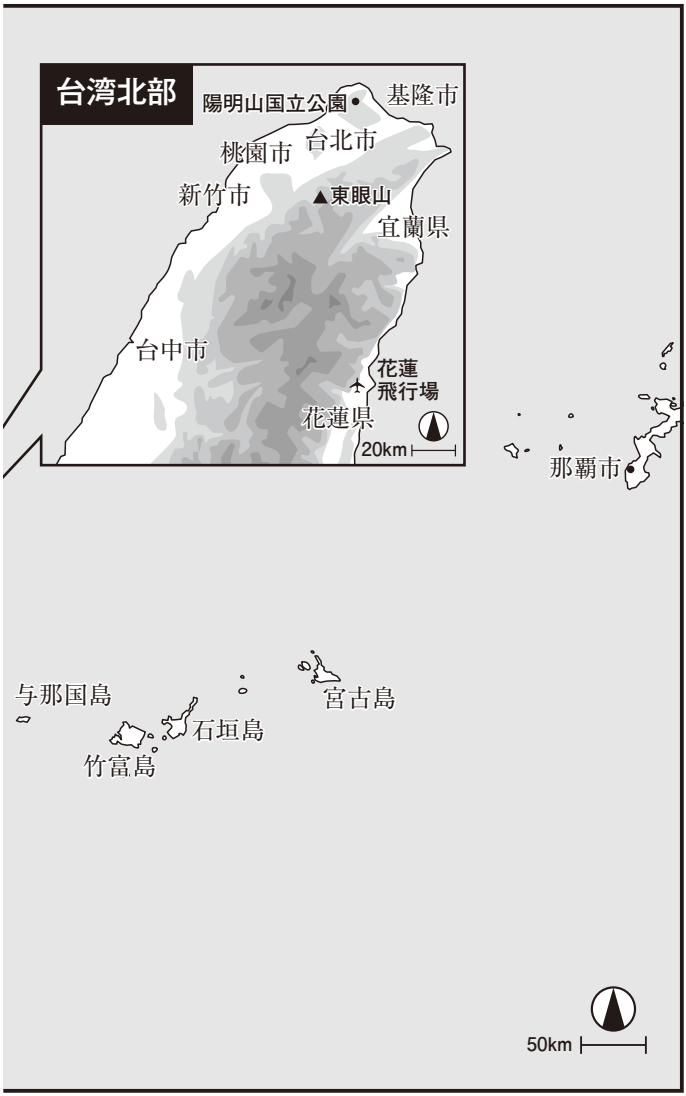
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

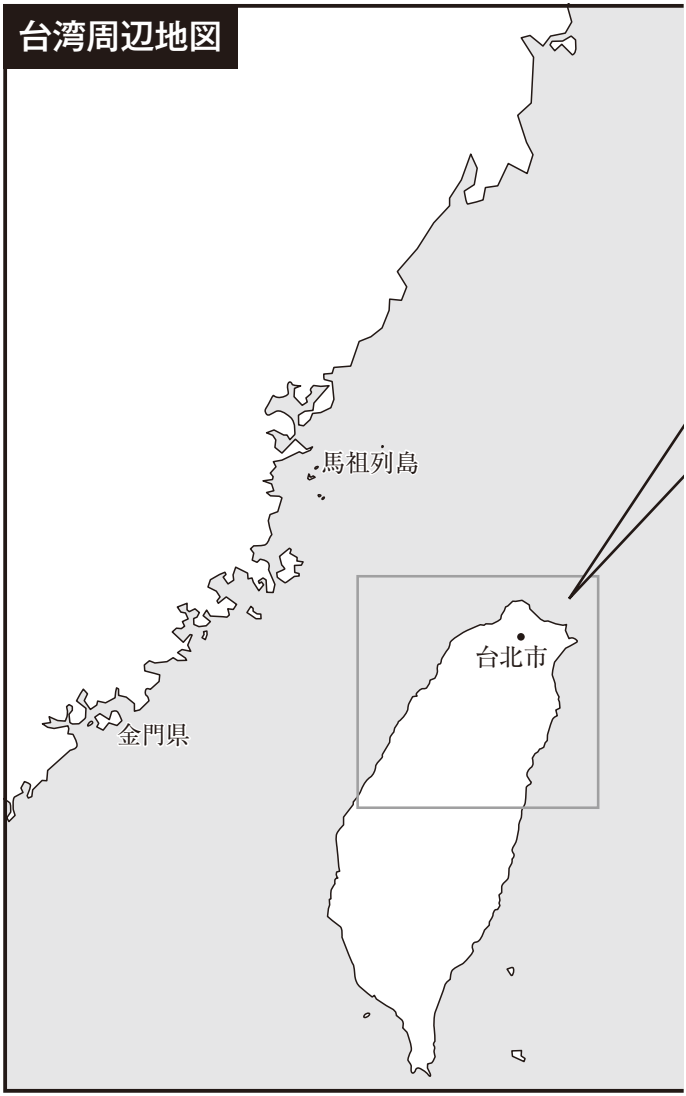
口絵・挿画　安田忠幸

地図　平面惑星

目次

プロローグ　15
第一章　コンビニ　24
第二章　モーメント　45
第三章　東京タワー　72
第四章　大義名分　100
第五章　避難行動　127
第六章　最後通牒　154
第七章　軍神　177
第八章　ニイタカヤマノボレ　199
エピローグ　213


台湾北部
陽明山国立公園
基隆市
台北市
桃園市
新竹市
▲東眼山
宜蘭県
台中市
花蓮
飛行場
花蓮県
20km
那覇市
与那国島
宮古島
石垣島
竹富島
50km


台湾周辺地図
馬祖列島
台北市
金門県

登場人物紹介

日本

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平　陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

原田拓海　一尉。陸海空三部隊を渡り歩き、土門に一本釣りされ入隊。

畑 友之　曹長。分隊長。コードネーム：ファーム。

高山健　一曹。分隊長。コードネーム：ヘルスケア。

大城雅彦　一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

待田晴郎　一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

田口芯太　二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実　三曹。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

吾妻大樹　三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〈姜小隊〉

姜彩夏　三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。

漆 原武富　曹長。司馬小隊ナンバー２。コードネーム：バレル。

福留弾　一曹。分隊長。部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

井伊翔　一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

水野智雄　一曹。元オリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

西川新介　二曹。もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

御堂走馬　二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

姉小路実篤　二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

川西雅文　三曹。元Ｊリーガー。コードネーム：キック。

由良慎司　三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

小田桐将　三曹。タガログ語使い。コードネーム：ベビーフェイス。

阿比留憲　三曹。対馬出身。コードネーム：ダック。

赤羽拓真　三曹。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

甘利宏　一曹。元は海自のメディック。コードネーム：フアラライ。

《水陸機動団》
松尾捷　陸将補。
司馬光　一佐。水陸機動団教官。
畠山惣一郎　一佐。松尾陸将補率いる部隊のナンバー３。
白馬剛　一佐。第一機動連隊連隊長。
神田忠司　三佐。第一中隊長。空挺出身。
難波武次郎　准尉。最先任上級曹長。
富坂俊郎　三尉。空挺出身。

●海上自衛隊
《第一航空群》
河畑由孝　海将補。第一航空群司令。
下園茂喜　一佐。首席幕僚。
伊勢崎将　一佐。第一航空隊司令。
《第一護衛隊群》イージス護衛艦〝まや〟（10250 トン）
國島俊治　海将補。第一護衛隊群司令。
梅原徳宏　一佐。首席幕僚。
《第一潜水隊群》そうりゅう型潜水艦十一番艦〝おうりゅう〟（4200 トン）
永守智之　一佐。第一潜水隊群司令。
生方盾雄　二佐。〝おうりゅう〟艦長。
新藤荒太　三佐。〝おうりゅう〟副長兼航海長。
村西浩治　曹長。航海科。原田拓海とは同期で、生徒隊繋がり。

●航空自衛隊
《総隊司令部》
丸山琢己　空将。航空総隊司令官。
羽布峯光　一佐。総隊司令部運用課別班班長。
喜多川・キャサリン・瑛子　二佐。情報将校。横田出身で、父親はイラクで戦死したアメリカの空軍将校。
五十嵐洋　二佐。陸上総隊運用部所属。ウイングマークの持ち主のヘリ屋。
樋上幸太　二佐。Ｐ－１乗り。前職は鹿屋の第一航空隊幕僚。航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。
新庄藍　一尉。父親は防府の鬼教官だった。ＴＡＣネーム：ウィッチ。
〈警戒航空団〉
戸河啓子　二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

・第六〇二飛行隊
内村泰治　三佐。第六〇二飛行隊副隊長。イーグル・ドライバー上がり。
・第三〇七臨時飛行隊
日高正章　二佐。飛行隊長。

●防衛省
桑原博司　防衛政務官。国防部会、日台友好議連のメンバー。
《陸幕防衛部》
牛嶋保夫　陸上幕僚長。陸将。
竹義則　二佐。航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。
《海幕防衛部》
福原邦彦　二佐。海幕防衛部装備体系課付き。前職は護衛艦の艦長。航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。

●外務省
片倉宗一郎　外務審議官。サイレント・コアの内部事情にも明るい。
九条寛　外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長。
《アメリカ大使館》
ジョー・ストラットン　政務担当参事官。
《中国大使館》
李福東　公使。
《ロシア大使館》
イヴァン・ツルネンコ　二等書記官。
〈日本台湾交流協会〉
和泉史朗　台北事務所所長。事務所のナンバー３で、大使相当。外務省チャイナ・スクールの一人。

●内閣
阿相士郎　総理大臣。

●警察庁
柊木尚人　警視長。関東管区警察局・サイバー局参与。

●警視庁
灰谷昭雄　元警部。警視庁公安部のベテラン捜査官だった。

●国際連合
西園寺照實　国連職員。国連軍縮局に所属。

●民間軍事会社
音無誠次　土門の元上司。自衛隊退役者からなる民間軍事会社の顧問。

●桜会
赤峰鉄蔵　グループ社長兼代表取締役社長。
浜田左千夫　元陸自三佐。関東エリアＢＣＰ（事業継続計画）本部長。
田中太志　元陸自一曹。八王子センター営業班員。

●日越人材ブリッジ
ディン・レイ・スエン　代表取締役。京族。

●その他
井藤浩　元一佐。工学博士。陸上自衛隊初のサイバー戦部隊を立ち上げた後、民間に転じた。政府のセキュリティ・クリアランスを持つ。
霜山悠輔　桜会のコンビニの助っ人。190 センチ近い大男。
小町南　女子大生。コンビニの源氏名は「北町」。
安功児　小町と同じコンビニのアルバイト。源氏名は「瀬田」。
韮沢　多摩川沿いのタワマンに住む女性。

アメリカ

●空軍
オリバー・Ｒ・エバンズ　中佐。第 18 戦闘航空団の作戦参謀兼ＥＸのインストラクター。
エルシー・チャン　少佐。中国系。

中国

●陸軍
孔雪麗　中尉。情報部所属。中国の少数民族の一つである京族。
顔誠　軍曹（中士）。孔雪麗の部隊ナンバー２。

●海軍
《総参謀部》
孫友剛　陸軍少将。総参謀部第一部所属。
任思遠　海軍少将。総参謀部作戦部特殊作戦局局長兼特殊戦司令官。

黄桐（ホアントン）　大佐。局次長。

〈〝蛟竜突撃隊〟（ジャオロン）〉

徐孫童（シュイスントン）　中佐。〝蛟竜突撃隊〟を指揮する。

宋勤（ソンチン）　中佐。元北京大学日本研究センター研究員。

《南海艦隊》

東暁寧（トンシャオニン）　海軍大将（上将）。南海艦隊司令官。

賀一智（ホウイーチィ）　海軍少将。艦隊参謀長。

万通（ワントン）　大佐。艦隊対潜参謀。

《東海艦隊》075 型強襲揚陸艦二番艦〝華山（ファーシャン）〟（40000 トン）

唐東明（タンドンミン）　大将（上将）。東海艦隊司令官。

馬慶林（マーチンリン）　大佐。東海艦隊参謀。

・ＫＪ－600（空警－600）

浩菲（ハオフェイ）　中佐。空警－600 のシステムを開発。電子工学の博士号を持つエンジニア。

葉凡（イエファン）　少佐。空警－600 機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

秦怡（チンイー）　大尉。副操縦士。電子工学の修士号をもつ。

高学兵（カオシュエビン）　中尉。機付き長。ベテランエンジニア。

・Ｙ－９Ｘ哨戒機

鍾桂蘭（チョンクイラン）　少佐。ＡＥＳＡレーダーの専門家。

《第 164 海軍陸戦兵旅団》

姚彦（ヤオイエン）　少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

万仰東（ワンヤントン）　大佐。旅団参謀長。

雷炎（レイイェン）　大佐。旅団作戦参謀。天才軍略家の異名を持つ。

戴一智（タイイーチィ）　中佐。旅団情報参謀。

●中南海

潘宏大（パンホンタア）　中央弁公庁副主任。

●国内安全保衛局

秦卓凡（チィンチュオファン）　二級警督（警部）。

蘇躍（スゥユエ）　警視。許文龍とは旧知。

●科学院武漢病毒研究所

馬麗夢（マ リーモン）　博士。主任研究員。

●S機関
張高遠（ツァンガオユエン）　博士。数理データ・サイエンスの若き天才。

台湾

●陸軍
《第601航空旅団》別名〝龍城部隊〟
傅祥任（フーシャンジェン）　少将。旅団長。
平龍義（ピンロンイ）　少佐。第1中隊長。
藍志玲（ランチーリン）　大尉。女性のグラビア・アイドル。コールサイン：マリリン。
黄益全（ファンイーチェン）　少尉。藍志玲大尉と前席射撃手（ガナー）として組む。
田子瑜（ティエンズーユイ）　少尉。新米仕官。

●海兵隊
《第99旅団》別名〝鐵軍部隊（アイアン・フォース）〟
陳智偉（チェンヂーウェイ）　大佐。一個大隊を指揮する。
黄俊男（ホァンジュンナン）　中佐。作戦参謀、大隊副隊長。フロッグマン部隊出身。
呉金福（ウージンフー）　少佐。情報参謀。
劉金龍（リウジンロン）　曹長（上士）。コードネーム：ドラゴン。

●空軍
李彦（リーイェン）　空軍少将。第5戦術戦闘航空団を指揮する。
劉建宏（リウジェンホン）　空軍中佐。第17飛行中隊を率いる。編隊長機。

●国防省
谷進強（クージンチャン）　国防大臣。前国家安全局長。異名は〝氷の男（アイスマン）〟、〝岩の男（ザ・ロック）〟。

●その他
王志豪（ワンチーハオ）　退役海軍中将。海兵隊の元司令官。
王文雄（ワンウェンション）　台日親善協会と国民党の対外宣伝部次長。王志豪とは遠縁。京都大学法学部、大学院を出ている。
賴筱喬（ライシャオチャオ）　戦死した賴龍雲陸軍中将の一人娘。台北の飲茶屋の店主。

シンガポール

●インターポール・反テロ調整室（RTCN）
許文龍（シュウェンロン）　警視正。ＲＴＣＮ代表統括官。
メアリー・キスリング　ＲＴＣＮの次長。ＦＢＩから派遣された黒人女性。
柴田幸男（しばたゆきお）　警視正。警察庁から派遣されている。

朴机浩（パクボム・ホ）　警視。韓国警察から派遣されている。
マリア・ジョンソン　英国対外秘密情報部ＭＩ６極東統括官。大君主（オーバーロード）。

台湾侵攻1　最後通牒

プロローグ

いくつかの偶然が、女子大生・小町南（こまちみなみ）を、この未曽有（みぞう）の危機から孤立させていた。彼女は、昨夜二三時過ぎまで渋谷で女友だちと飲んでいたが、帰宅する時間帯、電車はまだ普通に動いていた。

居酒屋の隣のテーブルで、リーマン風の男たちが、戦争がどうのこうの……、と喋っていたような気がしたが、たぶん中国と台湾の戦争のことだろうと思った。人民解放軍が、台湾本島の南にある東沙諸島に奇襲上陸して占領したのだ。

あれからもう二週間近くになる。ネット上では、その後すぐ、今度は尖閣諸島の魚釣島に上陸してきて、自衛隊と激しい戦争になっているという噂が飛び交っていたが、そんなはずはなかった。政府は何も発表しないし、ニュースにもなっていなかったからだ。ただネット上で、匿名の集団が騒いでいるだけだ。

前日、内閣が総辞職したが、理由はよくわからなかった。もとから政治にはたいして関心は無いし、選挙にも行ったことはない。たぶん投票なんて一生行かないだろうと思った。

朝起きた時、トイレの電気が消え、ファンも回っていないことに気付いた。携帯もネットも繋がらなかったが、たぶん料金未納か何かのせいだろうと思った。

普段はうるさい東名インター付近の高速も静かで、トラックが数珠つなぎになって渋滞しているらしいことがわかったが、それは何かの事故渋滞だろうと思ったし、彼女は、二日酔いでずきずき痛む頭を押さえながら、早くアルコールを抜こうと水をコップ一杯飲んでまた横になった。バイトのシフトは夕方からだ。徹夜シフトで、明日はもちろん大学で講義があるが、出欠が取られるわけでなし、後ろの席で寝て過ごせば良い。

そんなわけで彼女は、午後まで寝て過ごすつもりだったが、アパートの二階に上がってきた誰かの呼び鈴で起こされた。どうせ何かのセールスだろうと無視した。

子供の声が聞こえたので、次に、これは宗教の勧誘だな、と思った。自分のカルト信仰の布教に子供を巻き込むなんてとんでもない連中だと思って、もちろん無視した。

だが、しつこくドアを叩かれたので、やむなく起きた。玄関で「間に合っています！」とだけ怒鳴ってまたベッドに戻ろうとしたが、ドアの向こうで「あの……、セールスでも勧誘でも無いんです！　お願いします――」とせっぱ詰まった声が聞こえた。

子供の、「帰ろうよ、ママ」という声も聞こえた。気になって、ドア・チェーンを掛けたまま、細目にドアを開けた。

「何でしょうか？」

「あの……、私、近所の者なんですけれど、お湯を頂戴したいんです。赤ちゃんのミルクを作るお湯を！」

右手にもった魔法瓶がさっと伸びてくる。三歳くらいの男の子の手を引いている。母親は三〇歳代半ばに見えた。余所行きの格好で、きちんと化粧し、赤ちゃんを抱っこひもに抱いているように

見えた。まだほんの赤ちゃんだ。生後五ヶ月くらいだろうか。母親の胸にちんまりと抱かれてすやすやと寝ている。

　こんなちゃんとした身なりの女性がガス代に困っているようには見えなかったし、もちろんこのボロアパートの住人にも見えなかった。

　彼女は、ドア・チェーンを外して玄関を開けた。幼児がつかつかと入り込んできた。

「駄目よ！　僕ちゃん。他人様のお家に勝手に入っちゃ……」

「お湯ですか？」

「ごめんなさい。今、電気もガスも止まっているでしょう。でもこのアパートはプロパンガスだから、お湯を作れるんじゃないかと思って、お願いして良いかしら」

「停電しているんですか？」

　そうだ。まちがいなく停電している……。部屋中の電気が点かないのはそのせいだとようやく理解した。でも都市ガスも駄目だとはどういうことだろうかと思った。

「とりあえず、お湯を作りますから、待ってて下さい」

　彼女は、いったんドアを閉めて鍋に水を入れて火を点けた。ヤカンの類いはなかった。ラーメンを煮るための片手鍋があるだけだ。ガスは点く。気にしたことは無かったが、確かにこのボロアパートは、ボロ故に、昔ながらのプロパンガスだった。

　再びドアを開けて玄関に立った。

「ご迷惑をお掛けしてごめんなさい。近くに頼れる人もいなくて」

「タワマンから来たんだよ！」

　と坊主が自慢した。

「タワマン？　この辺りにタワマンなんて建って

いないけれど……」
「ええ。あのほら、多摩川沿いのタワマンです。主人が、天体望遠鏡で下々と言うか、いえ失礼！庶民の暮らしを眺めるのが趣味で、それで、以前から、この辺りに今時プロパンガスのボンベが置いてある古いボロアパートが建っていたことを思い出して……」
「はあ……」
別に反論すべき点はない。全て事実だ。
「あ、別に貴方の部屋を覗き見していたわけではないのよ。この部屋は北向きで、タワマンは反対側だし。つまり、うちも、タワマンとは言っても北向きの部屋なのね。花火が見える側の部屋は抽選倍率が高くて、外れてしまったの。別に買えなかったわけではないのよ」
と母親は無念そうに話した。
「停電とか、いつからですか？」
「貴方、ご存じ無いの？」
「ええ。昨夜はいろいろあって」
「では総理大臣の声明とかも見ていない？」
「いつのことですか？」
「昨夕だったかしら。中国との間で戦争状態になったという宣言よ。自衛隊が出動しているそうです。で、噂ですけれど、ソ連軍が攻めてきて、新潟に上陸して、間もなく戦車部隊が碓氷峠を越えてくるんですって」
「ソレングン？……、て、ソヴィエトのことですか？」
「ええ。ああでも、それを教えてくれたのは、隣に住んでいる、ちょっと惚けが入ったどこかのお役所の元事務次官ご夫人だから、少し違ったかも」
「それだったら……、逃げた方が良いんじゃないですか？　こんなことしているより」

「それも考えたんですけど、何しろ東名も環8も246も、全く動いていないのよね。渋滞が酷くて。私も主人が運転するアウディで、あちこち抜け道を辿りながらようやく、このごちゃごちゃした下町に辿り着けたくらいで。貴方、ニュースくらいご覧にならないの？」

「うちは、テレビもラジオもないので。スマホで間に合っているので……」

「最近の若い人はそうよね。うちは一応自家発電装置が動いているんですけれど、それはエレベーターや上下水道のポンプを動かすためだそうで、室内の電気は何も動かないのよ。ほら、そもそもタワマンて、ガス器具が使えないから、電磁調理器しか置いてないし」

　遠くから消防車のサイレンが聞こえてくる。拡声器が何かを喋っていたが、全く聴き取れなかった。

「行政を頼るとか……」

「ええ。でも、公民館？　そういうのがどこにあるのか知らないのよね。小学校もどこにあるのか……。住民はみんな、子供は私立だから、ご近所さんに、この学区の小学校はどこですか？　と聞いても誰も知らないのよ」

　小学校は選挙の投票所にもなるから、普通の大人なら知っているものだが、まあ自分も投票にはいかないし、と彼女は思った。上級国民の自慢話をもう少し聞かないでもなかったが、お湯が沸いたので、魔法瓶を預かって入れてあげた。

「有り難うございます！　お礼はこのくらいで良いかしら？」

　と、母親は折りたたんだ一万円札を差し出した。

「とんでもない！　たかがお湯くらいで――」

「いえ、お願いがあるの。停電がいつ解消されるかわからないから、またお伺いすることになるか

も知れない。最悪の場合は、私と赤ちゃんだけでも、ここで御世話になるかも知れないから」

やはり、この図々しさが、一般ピーポーから上級国民へ成り上がる秘訣なのだろうなと彼女は感心した。だが、彼女はその時、ふと思い出した。

「あの、そのタワマンて、ガス器具は絶対使っちゃ駄目なんですか？」

「いえ、キッチン器具として使っては駄目だというだけよ。カセットコンロとか使うのは構わないことになっている。朝一でコンビニに走ったけれど、何もかも売り切れで……。そもそもうちは子供が小さいから、お鍋も焼き肉もしないし。でも時々、タワマンの庭で、住民によるグランピング・パーティとかあるのよね。テントを張って、夜はイルミネーションを飾り立てて、バーベキューとか」

彼女は、いったん部屋に引っ込み、キッチンの収納棚から、コンロとカセットボンベを二本取り出した。

「最近、使っていないけれど、一本は未使用でまだ満タンのはずです。ミルクのお湯を作る程度なら、これで何日かは持つでしょう」

母親は、一歩後ずさって、「ええっ！　こんなものを頂戴して良いのかしら？」と驚いた。

「ここは、しばらくプロパンが使えるし、今は要らないでしょう。使って下さい。赤ちゃんのために」

彼女は、それを汚れたトートバッグに入れてやった。

母親の目に涙が浮かんでいた。慌てて、腰のポーチからヴィトンの財布を取り出した。

「お礼に、受け取って下さい！　ぜひ」

万札が二〇枚ほど入っているのが見えて、彼女は目を白黒させた。

母親は、一〇万円を渡そうとした。
「とんでもない！　じゃあさっきの一万円を貰いますから」
「いえ、それでは私の気が済まないわ。主人からも怒られる。貴方だって、これから何があるかわからないから現金は多めに持っていた方が良いでしょう？　これも何かのご縁よ、ぜひ受け取って下さい！」
「はあ……、では五万円、頂戴します」
と彼女はそれを受け取った。
「私、あそこのB棟に暮らす韮沢（にらさわ）と言います！　何かあったらぜひいらして下さい。たぶん備蓄したビスケットくらいは管理組合が持っているはずだから。ここから歩くにはちょっと遠いけれど。夏の花火大会にはぜひご招待するわ。最上階のパーティ・ルームが開放されるから」
「はい。有り難うございます。お気を付けて」
坊やがバイバイと手を振ってくれる。まあ、嫌みな金持ちでもガキは普通に可愛いなと思った。母親が何度も振り返り、お辞儀しながら階段を降りていく。
「ああ、階段気をつけて降りて下さい！」と呼びかけた。
車が出てくる。高級外車を運転している旦那が、運転席越しにペコリと頭を下げるのが見えた。たぶん、男がノックするより、子連れの母親の方がドアを開けてもらえるだろうという判断だろう。
一生縁の無い階層の連中だが、子に罪はない……。そう思うしか無かった。財布ごとよこせ！くらい言っても罰は当たらなかったな……、と彼女は思った。
あの川沿いのタワマンからここまで、直線距離でも二キロは越えるはずだ。タワマンから天体望遠鏡で下々の暮らしを観察して満たされる好奇心

というのは、どんなものだろうと思った。

中国と戦争？……。そんなバカな――。

日本は、事実として中国との間で戦争状態にあった。人民解放軍による東沙島電撃占領作戦から台湾軍が密かに脱出する作戦を海上自衛隊潜水艦がサポートし、その報復というわけでもないが、中国軍は、台湾攻略の第二段階として尖閣諸島魚釣島へと上陸してきた。

海上自衛隊は、イージス艦のミサイルを何隻分も撃ち尽くし、空では、航空自衛隊が百機単位の大空中戦を繰り広げ、中国側は、軍艦を何隻も沈められていた。

自衛隊は、戦力の逐次投入を繰り返しつつ、最後には陸上自衛隊水陸機動団が大きな犠牲を払って、上陸した解放軍を追い出し、島の奪還に成功した。

だがその闘いは、単に尖閣諸島を巡る闘いが一段落したというだけのことで、中国は、台湾と日本に対して、次の闘いを仕掛けていた。

超限戦――、ハイブリッド戦争だ。電源システムを破壊、もしくは潜入した工作員によって変電所を爆破し、インターネット網の海底ケーブル引き揚げ基地を爆破し、東京スカイツリーへの電源供給網も破壊してテレビもラジオもダウン、なぜか衛星テレビも映らず、日本列島全域をブラックアウトさせた。

台湾も、似たような状況にあった。

東京では、昨夜の終電直前から電車は止まっており、同時に関東地方全域が停電し、夜明け前には、インターネットも完全にダウンしていた。

携帯電話も不通なら、固定電話も、集中する輻輳（ふくそう）によって、お昼のこの時間帯も完全に麻痺していた。一部に繋がる公衆電話には、長蛇の行列が

出来ていた。
女子大生、小町南は、それらの状況をまる半日、全く知ることは無かった。

第一章　コンビニ

関東エリアＢＣＰ（事業継続計画）本部長の浜田左千夫元陸自三佐は、新宿の高層ビルに入る東京店舗センターの大広間の正面、スクリーンの前に立ち、久しぶりに再会した面々と世間話していた。

部屋に灯りはなく、外光だけでもっている。空気は淀み、湿気が籠もってむしむししていた。

全員、どこか普通のサラリーマンとは雰囲気が違った。年齢はバラバラ、一見営業集団にも見えるが、全員が短髪で、よく日焼けしている。背筋をピンと伸ばし、談笑はするが、無駄話はしない。一人が喋り始めると、他はぴたりと会話を止めてその話に聞き入った。百名近い男たちがその場にいる。ほんの十名足らずだが、女性もいた。

「田中さんは、八王子センターからどうやってここまで辿り着いたの？　丁度四〇キロくらいでしょう。たまたまこの辺りにいたとか？」

「いえ。例のレンタ・サイクルで仲間と一緒に下の道を走ってきました。バイクで中央道という手段もありましたが、全員が利用できる手法ではないので。往路はそれでも二時間弱で。帰りは荷物もあるだろうし、渋滞にはまりつつなので、三時間を予定しています。バッテリーは使っていません」

八王子センター営業班員の田中太志（ふとし）元陸自一曹は、なんてことはないという顔で答えた。
「事故には気をつけてください。お互いもう若くはない」
「はい。毎日、一〇キロをジョギングして営業所に通っていますので体力的には問題ありません。空気入れやパンク修理道具一式も持参しております」
「私も真似したいけど、この辺りは交通量も多ければ空気も良くないしね」
背広姿の男性二人がドアに現れると、全員が弾かれたように立ち上がり、腰を四五度曲げてお辞儀した。
「堅苦しいことはなしにしましょう。座って下さい皆さん」
と、グループ社長兼代表取締役社長の赤峰鉄蔵（あかみねてつぞう）が浜田の隣に立った。
「どうにかここまで辿り着いた。大崎の本社ビルから、走り屋の若い奴が運転するバイクの後ろにしがみついてここまで走ってきた。道路はどこも酷い渋滞です。さすが皆さんはプロだ。何喰わぬ顔でここまで辿り着くなんて。
さて、何から話そう……。我がコンビニ・グループが、退職自衛官を積極的に受け入れるようになったのは、バブルが破綻した頃からだと聞いています。当時、コンビニは全国にサービスを拡大させていた。その頃を知る連中に言わせると、批判もあったらしい。挨拶も出来るし、時間厳守で忍耐力もある。その辺りはさすが自衛隊上がりだが、三〇代後半とか、四〇代のもう頭が固くなった世代を中途採用で採って、使いものになるのか？　という批判もあったやに聞きました。だが、皆さんは、立派な戦力となり、とりわけ、3・11の大災害の時には、その持ち前の危機対応能力で

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。